

横光利一

純粹小説論

純粹小說論

もし文芸復興というべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない、と今も私は思っている。私がこのように書けば、文学について鍊達の人であるなら、もうこの上私の何事の付加なくとも、直ちに通じる筈の言葉である。しかし、私はこの言葉の誤解を少くするため、少し書いてみようと思う。

今の文壇の中から、真の純粹小説がもし起り得るとす

るなら、それは通俗小説の中から現れるであろうと、このように書いた達識の眼光を持っていた人物は、河上徹太郎氏である。次に通俗小説と純文芸とを何故に分けたのか、別けたのが間違いだと云った大通は、幸田露伴氏である。次に、もし日本の代表作家を誰か一人あげよと外人から迫られたら、自分は菊池寛をあげると云った高邁な批評家は、小林秀雄氏である。今日の行き詰った純文学に於て以上のような名言が文学に何の影響も与えずに、素通りして来たのは、どうした理由であろうかと、もう一度考え直してみなければ、純文学は衰滅するより

最早やいかんともなし難いとこのように思った私は、この正月の五日の読売新聞へ、純文学にして通俗小説の一文を書いた。私の文章は、以上の人々の尻馬に乗ったままで、何ら独創的な見解があつたわけではない。しかし、今は、達識の文学者の中では、私の云つたような言葉は定説とさえなっているのであるが、言葉の意味は、さまざまな誤解をまねいたようであつた。

今の文学の種類には、純文学と、芸術文学と、純粹小説と大衆文学と、通俗小説と、およそ五つの概念が巴となつて乱れているが、最も高級な文学は、純文学でもな

ければ、芸術文学でもない。それは純粹小説である。しかし、日本の文壇には、その一番高級な純粹小説というものも、諸家の言のごとく、殆ど一つも現れていないと思う。純粹小説の一つも現れていない純文学や芸術文学が、いかに盛んになろうと、衰滅しようとして、実はどうでも良いのであつて、激しく云うなら、純粹小説が現れないような純文学や芸術文学なら、むしろ滅んでしまふ方が、良いであろうと云われても、何とも返答に困る方が、眞実のことである。

それなら、いったい純粹小説とはいかなるものかとい

うことになるのだが、この難しい問題の前には、通俗小説と純文学の相違を、出来る限り明瞭にしなければならぬ関所がある。人々は、この最初の関所で間誤間誤してしまつて、ここ以上には通ろうとしないのが、現状であるが、それでは一層ややこしくなる純粹小説の説明など、手のつけようがなくなつて、誰もそのまま捨ててしまひ、今は手放しの形であるのは尤もといわねばならぬ。しかし、考えてみれば、純文学の衰弱は、何と云つても純粹小説の現れないということにあるのであるから、文壇全体の眼が、純粹小説に向つて開かれたら、恐らく急流の

ごとき勢いで純文学が発展し、真の文芸復興もそのとき初めて、完成されるにちがいないと、このように思った私は、危険とは知りつつ、その手段として、純文学にして通俗小説の意見を数行書いてみたのである。

いったい純文学と通俗小説との相違については、今ままでさまざまの人が考えたが、結局のところ、意見は二つである。純文学とは偶然を廃すること、今一つは、純文学とは通俗小説のように感傷性のないこと、とこれ以外に私はまだ見ていない。しかし、偶然とは何か、感傷と

は何か、となると、この言葉の内容は簡単に説明されるものではなく、従ってその説明も、私はまだ一つも見ただことも聞いたこともないのであるが、しかし、事がこの最初で面倒になると、必ず、そんなことは勘で分るではないかと人々はいう。少し難しい言葉を使う人は、偶然のことを、一時性といい、偶然の反対の必然性のことを、日常性といっているが、感傷となると、これこそ勘で分らなければ、分り難い。先ずあるなら、一般妥当と認められる理智の批判に耐え得られぬもの、とでも解するより今のところ仕方もない。

私はこのような概念の詮索から始めるのは、面倒なので、通俗小説と純文学とを一つにしたもの、このものこそ今後の文学だと云ったのであるが、誤解を招いた責任は、私も持たねばならぬ。けれども、私の犯したこの冒険をせずして、純文学の概念に移ることは、容易ならぬ事業である。私はこの概念を明瞭にするためにここに『罪と罰』という小説を、今私は読みつつあるところだが、この小説には、通俗小説の概念の根柢をなすところの、偶然（一時性）ということが、実に最初から多いのである。思わぬ人物がその小説の中で、どうしても是非その

場合に出現しなければ、役に立たぬと思うときあつらえ向きに、ひよっこり現れ、しかも、不意に唐突なことばかりをやるという風の、一見世人の妥当な理智の批判に耐え得ぬような、いわゆる感傷性を備えた現れ方をして、われわれ読者を喜ばす。先ずどこから云つても、通俗小説の二大要素である偶然と感傷性とを多分に含んでいゝる。そうであるにもかかわらず、これこそ純文学よりも一層高級な、純粹小説の範とも云わるべき優れた作品であると、何人にも思わせるのである。また同じ作者の『悪霊』にしてもそうであり、トルストイの『戦争と平和』

にしても、スタンダール、バルザック、これらの大作家の作品にも、偶然性がなかなか多い。それなら、これらはみな通俗小説ではないかと云えば、実はその通り私は通俗小説だと思う。しかし、それが単に通俗小説であるばかりではなく、純文学にして、しかも純粹小説であるという定評のある原因は、それらの作品に一般妥当とされる理智の批判に耐え得て来た思想性と、それに適当したりアリティがあるからだ。

私は通俗小説にして純文学が、作者にとって、一番困難なものだと『読売』で書いたが、ここに偶然性と感傷

性との持つリアリティの何ものよりも難事な表現の問題が、横わっていると思う。純粹小説論の難儀さも、ここから最初に始つて来るのだが、いったい純粹小説に於ける偶然（一時性もしくは特殊性）というものは、その小説の構造の大部分であるところの、日常性（必然性もしくは普遍性）の集中から、当然起つて来るある特殊な運動の奇形部であるか、あるいは、その偶然の起る可能性、その偶然の起つたがために、一層それまでの日常性を強度にするかどちらかである。この二つの中の一つを脱れて偶然が作中に現れるなら、そこに現れた偶然はたちま

ち感傷に変化してしまう。このため、偶然の持つリアリティというもののほど表現するに困難なものはない。しかも、日常生活に於ける感動というものは、この偶然に一番多くあるのである。ところが、わが国の純文学は、一番生活に感動を与える偶然を取り捨てたり、そこを避けたりして、生活に懐疑と倦怠と疲労と無力さとをばかり与える日常性をのみ撰択して、これこそリアリズムだと、レツテルを張り廻して来たのである。勿論私はこれらの日常性をのみ撰択することを、悪リアリズムだとは思わないが、自己身辺の日常経験のみを書きつらねることが、

何よりの真実の表現だと、素朴實在論的な考えから撰択した日常性の表現ばかりを、リアリズムとして来たのであるから、まして作中の偶然などにぶつかると、たちまちこれを通俗小説と呼ぶがごとき、感傷性さえ持つにいったのである。けれども、これが通俗小説となると、日常性も偶然性もあつたものではない。そのときに最も好都合な事件を、矢庭に何らの理由も必然性もなくくっつけ、変化と色彩とで読者を釣り歩いて行く感傷を用いるのであるが、しかし、何ととっても、ここには自己身辺の経験事実をのみ書きつらねることはなく、いかに安

手であろうと、創造がある。事、創造である限り、自己
身の記事より高度だと、云えば云える議論の出る可能
性があるのみならず、何より強みの生活の感動があるの
だから、通俗小説に圧倒せられた純文学の衰亡は必然的
なことだと思う。純文学の作家にして、心あるものなら、
これを復興させようと努力することは、何の不思議もな
いのであるが、それを自身の足場の薄弱さを立て直そう
ともせず、大衆文学通俗文学の撲滅を叫んだとて、何
事にもなり得ない。そこで最も文芸復興の手段として、
私は純粹小説論の一端を書いたのだが、文学に於ける能

動精神も、浪漫主義も、ここから、発足しなければ、いったいいかなる能動主義の立場をとり、浪漫主義の立場を取ろうとするのか、足場がぐらぐらしては、恐らくどのような文学主張も、水泡に帰するにちがいはあるまい。しかし、文学作品を一層高度のものたらしめ、文芸復興の足場を造るためには、最早や純文学では無力であるから、これを純粹小説たらしめる努力をしなければならぬとなると、またさらに第二の難関が生じて来る。それは短篇小説では、純粹小説は書けぬということだ。先ず一例を上げて、通俗小説の持つ何よりの武器たるここ

ろの、感動の根源をなす偶然と感傷とについて云うなら、この偶然と感傷とに、純粹小説としての高度の必然性を与えるためにさえ、中島健蔵氏の云われる表現と生活との間に潜んだ例の多くの、「深淵」を渡らねばならぬ。

しかも、その深淵は、ただに表現と生活との中間のみの深淵とは限らず、生活に於ける人間の深淵と、それを表現した場合に於ける深淵と、三重に複合して来るのである。つまり、小量の短篇では、よほどの大天才といえども、純粹小説を書くということは不可能なことになって来る。なおその上に、純粹小説としての思想の肉化を企

てねば、高貴な現代文学が望めないとするなら、なおさら、百枚や二百枚の短篇ではどうするわけにもいかない。しかし、ここで、一度小説というものの、生い立ちを考えて見るべき用が起って来る。私は純粹小説は、今までの純文学の作品を高めることではなく、今までの通俗小説を高めたものだと思ふ方が強いのであるが、しかし、それも一概にそのようには云い切れないところがあるの
で、純文学にして通俗小説というような、一番に誤解される代りに、聰明な人には直ちに理解せられる云い方を
してみたのだけれども、それはさておき、近代小説の生

成というものは、その昔、物語を書こうとした意志と、日記を書きつけようとした意志とが、別々に成長して来て、裁判の方法がつかなくなったところへもって、物語を書くことこそ文学だとして来て迷わなかった創造的な精神が、通俗小説となって発展し、その反対の日記を書く随筆趣味が、純文学となって、自己周辺の事実のみまめまめしく書きつけ、これこそ物語にうつつをぬかすがごとき野鄙な文学ではないと高くとまり、最も肝要な可能の世界の創造ということを忘れてしまって、文体まで日記随筆の文体のみを、われわれに残してくれたのである

る。ここに、若い純文学者の心的革命が当然起らずには
いられぬ原因がひそんでいて、純文学の正統は日記文学
か、それとも通俗小説か、そのどちらかという疑問が起
って来た。リアリズムと浪漫主義の問題の根柢も、実は
ここにあって、私などは初めから浪漫主義の立場を守り
小説は可能の世界の創造でなければ、純粹小説とはなり
得ないと思う方であるのだが、しかし、純文学が、物語
を書こうとするこの通俗小説の精神を失わずに、一方日
記文学の文体や精神をとり入れようとしているうちに、
いつの間にか、その健康な小説の精神は徐々として、事

実の報告のみにリアリティを見出すという錯覚に落ち込んで来たのである。この病勢は、さながら季節の推移のように、根強く襲って来ていたために、物語を構成する小説本来の本格的なリアリズムの発展を、いちじるしく遅らせてしまった。そうして、文学者たちは、純文学の衰微がどこに原因していたかを探り始めて、最後に気付いたことは、通俗小説を軽蔑して来た自身の低俗さに思ひあたらねばならなかったのであるが、そのときには、最早遅い。身中には自意識の過剰という、どうにも始末のつかぬ現代的特長の新しい自我の襲来を受けて、立ち

上ることが不可能になっていた。このとき、文学を本道にひき上げる運動が、諸々方々から起つて来たのは、理由なきことではあるまい。文芸復興は、まだこれからなのである。

文芸を復興させねばならぬと説く主張をさまざま私は眺めて来たが、具体的な説はまだ見たことがなかった。文芸を復興させる精神の問題は、今ここで触れずに他日にゆずるが、本年に這入って旺んになった能動精神といひ、浪漫主義というのも、云い出さねばおられぬ多くの

原因の潜んでいることは、何人も認めねばなるまい。しかし、これらの主張も皆それらは純粹小説論の後から起るべき問題であつて、今、純粹小説を等閑にして文学としての能動主義も浪漫主義も、意味をなさぬと思う。その理由は、前にも述べた現代的特長であるところの、智識階級の自意識過剰の問題が横っているからであるが、いったい、浪漫主義と云い、能動主義を云う人々で、一番に解決困難な自意識の問題を取り扱った人々を、かつて私は見たことがない。この難問に何らかの態度を決めずに、どのような浪漫主義や、能動主義を主張しようとする

するのであろうか、疑問は誰にも残らざるを得ないのだ。一例を云えば、ここ三四年來捲き起つて來ていた心理の問題にしても、道德の問題にしても、理智の問題にしても、すべてが智識階級最後の、しかも一番重要な問題ばかりであつたのだが、浪漫主義も能動主義も、これらの問題から切り放れて、簡単に進行出来るものなら、それらは茶番にすぎまい。恐らく、今後いくらかの時間をへて必ず起つて來るにちがいない眞の浪漫主義や能動主義の文学は、心理主義の中から起つて來るか、眞理主義としての実証主義の中からか、個人道德の追求の中から起

つて来るか、理知主義の中から起つて来るか、どちらかにちがいはあるまいと思うが、それがそうではなくて、ただどうしようもない感傷主義の中から、起つて来たかのように見誤られる浪漫主義や、能動主義なら、むしろ消えるがために泡立ち上った前ぶれと見られても、仕方がないのである。わが国に現れた文学運動の最初は、いつもそのような運命に出逢っているのだ。多分、今現れている能動主義も、今後起つて来る浪漫主義の運動の中へ、一つに溶け込む運命的な剰余を当然持つていると見られるが、その浪漫主義にしてからが、法則主義への適合と、

法則への反抗との、二つに分裂している状態であってみれば、いずれも実証主義への介意から出発した挙動と見ても、さし問^{つか}えはないであろう。けれども、それはともかく、浪漫主義である以上は、何らかの意味に於ける旧リアリズムへの反抗であり、新しいリアリズムの創造であるべき筈だ。メルヘン的な青い花の開花は、逃げ口上の諦念主義と変化しても、悪政治の強力なときとしては致し方もあるまいが、しかし、いずれも新しいリアリズムの創造であるからは、法則に反抗した実証主義としての新しい浪漫主義がシェストフの思想となって流れて来

た昨今の文壇面では、それと必然的に關聯する自意識の整理方法として必ずいまに起つて来る新浪曼主義に転ぜずにはおられまい。能動主義も、作家が何かせずにはいられない衝動主義と見ても、我ら何をなすべきかを探索する精神であつてみれば、知識階級を釘付けにした道德と理智との抗争問題の起点となるべき、自意識の整理に向わなければ、恐らく何事も今はなし得られるものでもない。純粹小説の問題はこのようなときに、それらの表現形式として、当然現れねばならぬ新しいリアリズムの問題である。今、諸々の文学機関に現れている通俗小説

と純文学との問題は、すべて純粹小説論であることはさして不思議ではないのである。

中島健蔵氏の通俗小説と純文学の説論、阿部知二氏の純文学の普及化問題、深田久弥氏の純文学の拡大論、川端康成氏の文壇改革論、広津和郎氏、久米正雄氏、木村毅氏、上司小剣氏、大佛次郎氏、等の通俗小説の高級化説、岡田三郎氏の二元論、豊田三郎氏の俗化論、これらはすべて、私の見たところでは、純粹小説論であるが、それらの人々は、すべて実際的な見地に立って、それぞれ

れの立場から、純粹小説を書くために起る共通した利益にならぬ苦痛を取り除く主張であると見えても、さし問えはないのである。それらは通俗小説を書けというのでは勿論ない。現代の日本文学を、少くとも第一流の世界小説に近づける高級化論であつて、先ず通俗への合同低下の企画と思ひ間違える低俗との、戦いとなつて現れて来たのである。そうして、今はこの問題の通過なくして、文芸復興のどこから着手すべきものか私は知らない。恐らく、この現れは困難多岐な道をとることと思うが、作家共通の苦痛を除くためには、是非とも緊急なことであ

って、それなればこそ異口同音の説が形を変えて湧き興
って来たと見るべきで、私は新人として現れるものなら、
主義流派はともかくも少くとも純粹小説をもつて現れな
ければ意義がないと思うばかりでなく、旧人といえども、
純粹小説に関心なくして、今後の成長打開の道はあるま
いと思う。

ここで少し私は自分の純粹小説論を簡単に書いてみた
い。今までのべて来たところの事は、誰にでも通じるこ
とであったが、以下書くことは、現代小説を書こうと試
みた人でなければ興味のない部分に触れると思う。――

今までの日本の純文学に現れた小説というものは、作者が、おのれひとり物事を考えていると思つて生活している小説である。少くとも、もしそれが作者でなければ、その作中に現れたある一人物ばかりが、自分こそ物事を考えていると人々に思わす小説であつて、多くの人々がめいめい勝手に物事を考えているという世間の事實には、盲目同然であつた。もしこのようなきに、眼に見えた世間の人物も、それぞれ自分同様に、勝手気儘に思うだけは思つて生活しているものだと分つて来ると、突然、今までの純文学の行き方が、どんなに狭小なもので

あつたかということに気づいて来るのである。もしそれに気がつけば、早や、日記文学の延長の日本的記述リアリズムでは、一人の人物の幾らかの心理と活動とには役には立とうが大部分の人間の役には立たなくなるのである。前にもものべたように、人々が、めいめい勝手に物事を考えていることが事実であり、作中に現れた幾人かの人物も、同様に自分一人のように物事を思うものでない。いと作者が気付いたとき、それなら、ただ一人よりいい作者は、いったいいかなるリアリズムを用いたら良いのであろうか。このとき、作者は、万難を切りぬけて、

ともかく一応は幾人もの人間と顔を合せ、そうして、それらの人物の思うところをある関連に於てとらえ、これを作者の思想と均衡させつつ、中心に向つて集中して行かねばならぬ。このような小説構造の最困難な中で、一番作者に役立つものは、それは観察でもなければ、靈感でもなく、想像力でもない。スタイルという音符ばかりのものである。しかし、この音符を連ねる力は、ただ一つ作者の思想である。思想といつても、この思想を抽象的なものに考えたり、公式主義的な思考と考えるようなものには、アランの云つたように思想の何ものをも掴め

ないにちがいはないが、登場人物各人の尽くの思う内部を、一人の作者が尽く一人で攪むことなど不可能事であってみれば、何事か作者の企画に馳せ参ずる人物の回転面の集合が、作者の内部と相関関係を保って進行しなければならぬ。このときその進行過程が初めて思想というある時間になる。けれども、ここに、近代小説にとって、ただそればかりでは赦されぬ面倒な怪物が、新しく発見せられて来たのである。その怪物は現実モラルに於て、着々有力な事実となり、今までの心理を崩し、モラル道徳を崩し、理智を破り、感情を歪め、しかもそれらの混乱が新しい

現実となって世間を動かして来た。それは自意識という不安な精神だ。この「自分を見る自分」という新しい存在物としての人称が生じてからは、すでに役に立たなくなつた古いリアリズムでは、一層役に立たなくなつて来たのは、云うまでもないことだが、不便はそれのみにはあらずして、この人々の内面を支配している強力な自意識の表現の場合に、幾らかでも真実に近づけてリアリティを与えようとするなら、作家はも早や、いかなる方法かで、自身の操作に適合した四人称の発明工夫をしない限り、表現の方法はないのである。もうこのようになれ

ば、どんな風に藻掻こうと、短篇では作家はただ死ぬばかりだ。純粹小説論の起つて来たのは、すべてがこの不安に源を発していると思う。「すべて美しきものを」と浪漫主義者は云う。しかし、現代のように、一人の人間が人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼と、三様の眼を持って出現し始め、そうしてなお且作者としての眼さえ持った上に、しかもただ一途に頼んだ道德や理智までが再び分解せられた今になって、何が美しきものであるか。われわれの最大の美しい関心事は、人間活動の中の最も高い部分に位置する道德と理智とを

見脱して、どこにも美しさを求めることが出来ぬ。「われら何をなすべきか」と能動主義者は云う。しかし、いかに分らぬとはいえ、近代個人の道徳と理智との探索を見捨てて、われら何をなすべきであるのか。けれども、ここに作家の楽しみが新しく生れて来たのである。それはわれわれには、四人称の設定の自由が赦されているということだ。純粹小説はこの四人称を設定して、新しく人物を動かし進める可能の世界を実現していくことだ。まだ何人も企てぬ自由の天地にリアリティを与えることだ。新しい浪漫主義は、ここから出発しなければ、創造

は不可能である。しかも、ただ単に創造に関する事ばかりではない。どんなに着実非情な実証主義者といえども、法則愛玩の理由を、おのれの理智と道德とのいずれからの愛玩とも決定を与えぬ限り、人としての眼も、個人としての自分の眼も、自分を見る自分の眼も、容赦なくふらつくのだ。私はこの眼のふらつかぬものを、まだそんなに見たことがない。いったい、われわれの眼は、理智と道德の前まで来ると、何ぜふらつくのである。純粹小説の内容は、このふらつく眼の、どこを眼ざしてふらつくか、何が故にふらつくかを索ることだ。これが純粹

小説の思想であり、そうして、最高の美しきものの創造である。も早やここに来れば、通俗小説とか、純文学とか、これらの馬鹿馬鹿しい有名無実の議論は、万事何事でもない。

しかし、純粹小説に関して、なお細い説明をつけようとすれば、ここにまた次の新しい技術の問題が現れて来なければならぬ。それは自然の中に現れる人物（人間）というものは、どこからどこまでが小説的人物であるかという、残しておいたまことに厄介な解釈である。純粹

小説論は哲学とここの所で一致して進むべきものと思うが、しかし同時にここから、技術の問題として、袂を分けて進まねばならぬ。私は話意を明瞭にするために、前からのべて来たところをしばらく重複させねばならぬが、いったい、人間は存在しているだけでは人間ではない。それは行為をし、思考をする。このとき、人間にリアリティを与える最も強力なものは、人間の行為と思考の中間の何ものであるかと思ひ煩う技術精神に、作者は決定を与えなければならぬ。しかも、一人の人間に於ける行為と思考との中間は、何物であろうか。この一番

に重要な、一番に不明確な「場所」に、ある何ものかと混合して、人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼とが意識となつて横わっている。そうして、行為と思考とは、様々なこれらの複眼的な意識に支配を受けて活動するが、このような介在物に、人間の行為と思考とが別たれて活動するものなら、外部にいる他人からは、一人の人間の活動の本態は分り得るものではない。それ故に、人は人間の行為を観察しただけでは、近代人の道徳も分明せず、思考を追求しただけでは、思考という理智と、行為の連結力も、洞察することは出来ないの

である。そのうえに、一層難事なものがまたここにひかえている。それは思考の起る根元の先験ということだが、実証主義者は、今はこれを認めるものもないとすればそれなら、感情をもこめた一切の人間の日常性というこの思考と行為との中間を繋ぐところの、行為でもなく思考でもない聯態は、すべて偶然によって支配せられるものと見なければならぬ。しかし、それが偶然の支配ではなくて、必然性の支配であると思わなければ、人間活動として最も重要な、日常性について説明がつかぬばかりではない、日常性なるものさえがあり得ないと思わねばな

らぬのである。これは明らかに間違いである。

こうなれば、作家が人間を書くとは、どんなことを云うのであろうか。純粹小説論の結論は、所詮ここへ来なければ落ちつかぬのである。しかし、人間を書き、その活動にリアリティを与えねばならぬとなれば、いかなる作家といえども、この難渋困難な場合に触れずに、一行たりとも筆は動かぬ。すなわち、人間を書くということは、先ず人間のどこからどこまでを書くかという問題である。すでにのべたように、人間の外部に現れた行為だけでは、人間ではなく、内部の思考のみにも人間で

ないなら、その外部と内部との中間に、最も重心を置かねばならぬのは、これは作家必然の態度であろう。けれども、その中間の重心に、自意識という介在物があつて、人間の外部と内部を引き裂いているかのごとき働きをなしつつ、恰も人間の活動をしてそれが全く偶然的に、突発的に起つて来るかのごとき観を呈せしめている近代人というものは、まことに通俗小説内に於ける偶然の頻発と同様に、われわれにとって興味溢れたものなのである。しかも、ただ一人にしてその多くの偶然を持っている人間が、二人以上現れて活動する世の中であつてみれば、

さらにそれらの偶然の集合は大偶然となつて、日常いたる所にひしめき合っているのである。これが近代人の日常性であり必然性であるが、このようにして、人間活動の真に迫れば迫るほど、人間の活動というものは、実に瞠目するほど通俗的な何物かで満ちていとすれば、この不思議な秘密と事実を、世界の一流の大作家は見逃がす筈はないのである。しかも彼らは、この通俗的な人間の面白さを、その面白さのままに近づけて真実に書けば書くほど、通俗ではなくなつたのだ。そうして、このとき、卑怯な低劣さでもつて、この通俗を通俗として恐れ、

その真実であり必然である人間性の通俗から遠ざかれば遠ざかるに従って、その意志とは反対に通俗になっていくという逆説的な人間描法の魔術に落ち込んだ感傷家が、われわれ日本の純文学の作家であったのだ。この感傷の中から一流小説の生れる理由がない。しかし、も早やこの感傷は赦されぬのだ。われわれは真の通俗を廃しなければならぬ。そのためには、何より人間活動の通俗を恐れぬ精神が必要なのだ。純粹小説は、この断乎とした実証主義的な作家精神から生れねばならぬと思う。

私は目下現れているさまざまな文学問題に触れつつ廻

り道をして純粹小説に関する覚書を書きすすめて来たが、人間をいかに書くかという最後の項には、触れることをやめよう。これは作家各自の秘密と手腕に属することであり、云い得られることでもない。唯ここでは、私は、自分の試みた作品、上海、寢園、紋章、時計、花花、盛装、天使、これらの長篇制作に関するノートを書きつけたような結果になったが、他の人々も今後旺んに純粹小説論を書かれることを希望したい。今はこのことに関する意見の交換が、何より必要なときだと思う。そのために、作家は延び上り成長するべきときである。浪漫主

義者も、能動主義者も、共にこの問題について今しばらく考えられたい。行動主義と自由主義については、その前に飛び越すわけには行かぬ民族の問題があるから、今は一先ずこれにはペンをつつしもう。今日本がヨーロッパと同一の位置にいるとは私には思えないからだ。私はヨーロッパの理智が、亜細亜の感情や位置の中で、どこまで共通の線となつて貫き得られるものかという限界を、前から考えてみたが、まだ今は我国のマルキシズムさえが、外部から見れば一種の国粹主義のごとき観さえ帯びている時代である。転向して来た作家評論家の行為

も何となく一番自然に無理なく見えるのも、原因はここにあるのだ。これらの人の行為は、内部からばかり見るものではなく、外部からも見なければ、自然や人間に忠実な見方とはいえないと思う。日本人の思想運用の限界が、これで一般文人に判明してしまった以上は、日本の真の意味の現実が初めて人々の面前に生じて来たのと同様であるのだから、いままであまりに考えられなかった民族について考える時機も、いよいよ来たのだと思う。私に今一番外国の文人の中で興味深く思うのは、ヴァレリイとジイドであるが、ジイドの転向に反して、ヴァレ

リーの動かぬのはただ単に思想実践力の両者の相違とばかりには思えない。一人は分ったから動き、一人は分つたから動かぬのか、あるいは、一人は分らぬから動き、他は分らぬから動かぬか、そのどちらかであろう。しかし、分り、分らぬとは、どこが違うか誰も定めたのではない。ただ私には、亜細亜のことは自分は知らぬから、云わないだけだと云ったヴァレリーの言葉が一番に私の胸を打つ。ところが、わが国の文人は、亜細亜のことよりヨーロッパの事の方をよく知っているのである。日本文学の伝統とは、フランス文学であり、ロシア文学だ。

もうこの上、日本から日本人としての純粹小説が現れなければ、むしろ作家は筆を折るに如くはあるまい。近ごろ、英国では十八世紀の通俗小説として通っていたトムジョーンズという作品が、純粹小説として英国文壇で復活して来たということだが、我国の通俗小説の中にも、念入りに験べたなら、あるいは純粹小説があるのかもしれない。このごろ私はスタンダールの『パルムの僧院』を贈られたので読んでいるが、これは純粹小説の見本ともいふべきものだ。この作者は『赤と黒』とを書いているとき、すでにトムジョーンズを読みつつ書いたといわ

れただけあって、この『パルム』も原色を多分に用いた
大通俗小説である。もし日本の文壇にこの小説が現れた
ら、直ちに通俗小説として一蹴せられるにちがいはあるま
い。純文学を救うものは純文学ではなく、通俗小説を救
うものも、絶対に通俗小説ではない。等しく純粹小説に
向って両道から攻略して行けば、必ず結果は良くなるに
定っていると思う。純粹小説の社会性と云うような問題
は他に適当な人が論じられるであろうから、私は今はこ
れには触れないが、しかし、純粹小説は可能不可能の問
題ではない。ただ作家がこれを実行するかしないかの問

題だけで、それをせずにはおれぬときだと思ふ事が、肝腎だと思ふ。

日本文学電子図書館

純粹小説論

著 者：横光利一

制作者：宮澤一郎

底 本：「世界文芸論集」、
世界教養全集 別卷 2
平凡社

1968年3月31日 7版発行

日本電子文学図書館